〈研究ノート〉

森下二郎

――校長辞任の問題――

宮沢正典

はじめに
一　校長辞任は卒業式直前か
二　辞任誤伝の背景
三　『校友会報』における森下校長
結　び

はじめに

『長野県松本蟻ケ崎高等学校七十年史』（長野県松本蟻ケ崎高等学校沿革史委員会編、一九七一年三月一日発行）は、同校の前身長野県松本高等女学校の校長森下二郎の辞任について次のように記述している。

昭和八年から昭和十五年という第二次大戦にすべての社会機構が組みこまれていく時期の七年間を森下は校長としてすごし、苦悩と矛盾に満ちた生活を精一杯たゝかっていた。それはまことに「いばらの道」といえよう。〔二四ページ〕

校長森下二郎は卒業式直前の三月十五日に退職し、自己の欺まんと訣別しようとした。〔二七九ページ〕

小岩井徳子氏は、松本高女専攻科在学中の三年間（一九三三年四月～一九三六年三月）森下の薫陶を受けた。[1] 同氏は卒業後教職に就くが、そこでの苦楽を森下に伝え、森下が誠実に応答していることは残されている書簡を通してもよくわかる。最近、小岩井氏は「私は生涯で一番好きな人を一人といわれれば先生を思うだろう」と書いている。深く敬意するさまが生涯に及んでいるのがうかがえる。同じ文章につづけて次のように述べている。

しかし一つわからなかったのは、校長を卒業式を前にして突然退職されたことだった。それは昭和十五年三月十五日である。現在まで四十年もその一点だけ、どうしてそんなことをなさったのか。無責任ではあるまいか。なぜ三月末までぢっと我慢されなかったのだろうかと思いつづけてきた。

しかし今になってやっと先生のなさったことは、先生の求めてやまなかった真実への服従のため、生命をかけてなさったことだと理解した。そのようなやめ方は社会的名誉や世の常識からいって挫折であり敗北である。いつわりの言葉を「この戦争は聖戦である」と語ることができなかったために、自分のいつわりをすてるためには生命をすてる――死ぬほかなかったのだと思う。

先生から愛されていた私が先生の本当の生命を理解することができず、四十年も不信の思いを一かけらでも持っていたことは本当に申しわけないことである。

〔中略〕校長時代三年間先生が身も心もそこなうほど悩みつづけられたその苦しみを共感していなかった。そして神の示される真実に生命をかけて従われたこと、神の前に打ちふされた苦しみを知らなかった。神にえらばれることがいかにおそろしい苦しいことであるか知らなかった。[2]

小岩井氏のこのような森下に対する一点の疑念とその解決への信仰を通しての苦悩の告白の発端は、「卒業式直前の辞職」であったことがわかる。そして、いまようやく「先生との間に顔をあわせておあいすることのできる日に心おきなくお目にかかってお詫びすることができる」境地をえたことを述べたのであった。小岩井氏のこの文章は、前記の校史の記述をうけて書かれたものだろうか。

森下二郎の戦時下日記『神と愛と戦争・あるキリスト者の戦争日記』（西尾実・清水義穂編、一九七四年、太平出版社刊）を批評した和田洋一氏も、「三月末日をもって辞職というならともかく、一五日とはどういうことか。卒業式を前にして校長が突如姿を消すとはどういうことか。これはただごとではない。戦争日記中の重要部分であるはずである」と述べ、そのことが『日記』では欠落していることを指摘している。[3] そして、その前後五〇日のあいだの日記の空白は、森下自身が書かなかったのか、それとも編者の意向によって抑えられたのかと疑問を呈している。

私は本誌前号の「キリスト者の戦時下日記――手塚縫蔵と森下二郎について――」において、それらの点の判断を留保したままであった。しかし、その後の調査で明らかになったことは活字にしておくべきことであると思い、松本高女時代の森下二郎像の一端とあわせて研究ノートとしておきたい。

一　校長辞任は卒業式直前か

『長野県松本蟻ケ崎高等学校七十年史』（以下『七十年史』と略記）は、いわば松本高等女学校の正史と言ってよいだろう。しかるにこの正史が、「これはただごとではない」ところの「卒業式直前」の校長辞職について、そのもたらしたであろう波瀾にまったく言及していない叙述法をとっていることは前号で指摘しておいたが、その個所は本稿の冒頭に引用した通りである。また、一九八一年一一月六日、よしゑ夫人（当時九〇歳）からうかがったところでは、それが卒業式前であったという認識はもっていなかったことにも触れておいた。

いずれにしろ、「卒業式直前」か否かは松本蟻ケ崎高校へ行きさえすれば、容易に確かめることができると思っていた。問い合わせて、一九八二年二月一六日に出かけてみると、同校では当時の卒業式次第や辞令の類については、

所蔵状態が不明であり、『校友会報』（一九三三年、森下校長のもとで創刊）さえも、『七十年史』編集にあたって編集委員が一卒業生から借用し、それが同窓会にあるのではないか、というような頼りないものであった。ただ、同校教頭登内順治氏に斡旋していただき、承諾をえていた小岩井徳子氏におあいするという収穫があった。

小岩井氏は一九三六年三月に松本高女専攻科を卒業して長野県上伊那郡中沢村小学校に赴任しており、一九四〇年三月の母校におけるできごとについての詳細には明るくなかったと思われる。しかし、帰省中森下夫妻の上京を見送ったのだろうか。森下は松本市東ノ町小岩井徳子宛に、印刷された「転住」の挨拶状を東京市渋谷区北谷町四八番地から四月一二日付で送っている。ただし消印は渋谷局四月二日（后4—8）と読める。もし二日であれば、後述のことと符節が合う。印刷の傍に筆で「其節は結構な御餞別の品をいただきました誠に有難う御座いました御健祥をいのります」と添え書きし、活字の「森下二郎」の名に並べて筆で「芳枝」と記した葉書がある。さて、森下の退職上京が、同氏を含めて周囲の人びとにとって、かなり唐突であったことは想像できる。それが「卒業式直前」という認識に結び付けられる伏線になった一因かも知れない。しかし、唐突と感じたのは当然であったとしても、小岩井氏が「卒業式直前」と思いこむようになったのはもう少し後のことではないだろうか。

ともあれ、私の疑問に対して、すでに前記のような文を書いている小岩井氏にとっても無関心ではいられないものがあって、私の問いを熱心に受けとめてもらえた。

同氏から紹介をえたのは後輩の西田千恵子氏である。西田氏は一九三三年四月松本高等女学校に入学、一九四〇年三月同校専攻科を卒業、くしくも森下の松本高女校長在任期間とまったく一致する期間在学したというもっとも適切な人物であった。そこで明らかになったことは、西田氏が受けた専攻科の卒業証書の授与者が森下二郎校長であり、

卒業式の日付が三月一四日ということであり、さらに、同日皆勤賞状を森下校長から直接手渡されたことを生きいきと記憶されていることであった。後日あらためての確認によれば、「さて御申越の私の卒業証書は昭和十五年三月十四日、授与者は森下二郎校長、皆勤賞状は同日、授与は学校名で直接森下校長より手渡されたものでございます。改めて四十余年前のものを出してみて一人なつかしんで居ります」（一九八二年七月一三日付書簡）ということであった。

翌日の二月一七日、私は当時松本高女教頭で、現在松本市北深志にお住いの中村忠雄氏に電話で次のようなおこたえをもらった。「森下先生のもとで一年間教頭をつとめた。（森下先生は）寡黙のいい先生であり、長いあいだつかえたかった。（先生が）卒業式の前にやめるはずはない。（卒業）式はすまされた」と。

つまり、森下は三月一四日に卒業式をすませて、かれの日記（四月九日）にあるように、三月一五日に依願退職し、四月二日東京に転住したのであった。小岩井氏への前記の転住通知は松本で用意しておいて、その日の午後に渋谷で投函したものとも考えることができる。

『校友会報』第一三号（昭和一五年三月二八日発行）巻末の「学校日誌」にはその前後を次のように記録している。

十三日（水）終業式、式後東京市四峡吹奏楽団吹奏ヲ聴ク
十四日（木）本科第卅九回、専攻科第十四回卒業式挙行、午後校友会送別総会ヲ開ク
十五日（金）午後同窓会ヲ開ク

以上でこのノートの目的の過半は果したと言っていいが、では、なぜ「正史」が「卒業式直前辞職」の誤伝を確言する記述をしたのだろうか。次に考察してみたい。

二　辞任誤伝の背景

森下二郎が、卒業式の直前に校長を辞したとする記述は管見のかぎりでは、この『七十年史』が嚆矢である。つづいて、この姉妹篇ともいうべき長野県松本蟻ケ崎高等学校七十周年記念誌『古稀』（同校沿革史委員会編、一九七一年一〇月八日発行）において執筆者たちの座談会「松本蟻ケ崎高校七十年史を執筆して」でも、いわば敷衍して次のように語っている。

上条（耿之介）　森下校長がやめて行く時の校友会報の中に、信念を持って生きよ、いけなかったら去る、と言っている。三月の卒業式の一〇日前にやめちゃった。

平沢（武男）　東京へ西尾実を頼って行っちゃって調べてみたら、恩給年限に一―二年足りない、そこで再び諏訪の中学の教壇に立つ。恩給になったつもりでいたんだ。森下にはそんなことより重大問題があった。今次の戦争は聖戦でありますと、八紘一宇の戦さに協力しなけりゃならぬと書いちゃった。それでもうえらいことを言っちゃったと悩んだ、だから良心的な先生ですよ。

〔中略〕

上条　森下二郎に一つ惜しいと思うのは、聖戦でありますといって、卒業式の式辞でしゃべってしまってから、その式辞に朱を入れ訂正して残している。そのとき教育を受けた生徒たちが何となくつまらないと言って涙をこぼしている。それに対して森下二郎は具体的に生徒に何の救いの手も伸ばさずにいる。時代だといえばそれまでだが、そのときに卒業式前に教壇を蹴飛ばしていくなら何らかのなせる手があったのではないか。

〔中略〕

上条　その当時の生徒の側から言わせてもらうと、何となくつまらなくて悲しくて涙がぽろぽろ出る。そういうときに先生が手を引っぱってくれなかったという、大げさに言えば放ってある。校長は一人悶々自分で苛責の念に耐えられない。こっちとこっちとつながっていない。〔同書、一二二―二三ページ〕

以上の叙述には、西尾実の影が見える。森下二郎が没したのは一九六二年六月二七日であり、その一周忌を前にして西尾の書いた「森下二郎君とその生涯」の文が『信濃教育』第九一九号（一九六三年六月号）に載っている。

それとの関係から問題になる第一の点は「西尾を頼って上京」したことである。西尾は次のように書いている。

東京へ出て、神田岩本町にあった中等教育図書株式会社――在来の教科書会社を統合した戦時体制下の教科書会社の、中等国語教科書編集室に勤務してもらうことになった。というのは、そのころわたしが、文部省に設けられていた教科書編集委員会の、中等国語編集委員長に推されていた関係から、森下君を会社の編集室に迎えることにしたのである。ところが、森下君はまだ恩給年数に達していなかった関係から、約一年ほど諏訪中学校および商業学校の国語担任として、東京の家に奥さんと、連れてきていた孫を残しておいて単身赴任し、そこからふたたび東京に帰って、同会社の編集室勤務を続けた。

また、別の文（「森下先生の人間像」『森下先生を偲ぶ会』所収、一九六六年一月刊）では次のように語っている。

〔森下君は〕松本高女校長として五、六年を経つうちに、日支事変が起って軍国的な指導が教育界にも要請され、森下君のキリスト教に対する信仰を中心とした平和主義から校長の立場に苦悩を深くし、退職することになりましたので、これ幸いと森下君を東京に引っぱり出すことにしたのです。途中、恩給年限の関係で諏訪中学と諏訪商業の国語の先生に帰ったことはありますが、それが終るとまた上京して、神田岩本町に新設された「中等教育教科書株式会社」の中にあった中等国語編集室に勤務してくれました。

西尾のこれらの叙述の内容は、森下自身の日記から判断される事実とは異なる。森下は、はじめ東京盲学校および失明傷痍軍人教育所の教授嘱託となって、一九四〇年四月一八日から出勤した（日記、四月一九日）。その就職を誰が斡旋したかは不明であるが、西尾はすくなくとも教科書会社への斡旋以外にはまったく触れていない。四月二〇日に目黒高等女学校に高等師範学校同期生の加藤因を訪うたが、不在であった（日記、四月二〇日）。たんなる上京の挨拶のつもりであったか、他の求職依頼の意図があったかは不明である。ただ、かれはすさんだ傷病兵との接触を苦痛に

思っていたようである。[4] 五月一〇日夜に西尾は森下のところに来訪した。それ以前に西尾が訪問していたか否かは日記からは不明であるが、このときにかれは「是非創作をしろとすすめた」(日記、五月一二日)とだけ記している。

例の恩給に関して、森下があわてたのは一九四〇年一二月下旬のことである。それは「旧臘、長野県から通知があって自分がかねて申請して置いた普通恩給は調査の結果、在職年数が恩給上、普通恩給年限に達しない(一六年三ヵ月で、規定年限一七年には九ヵ月足りない)。よって一時恩給を申請せよと言って来た」からであり、「大分あわてて一二月二八日から随分がやがやとあがいてあせって暮して来た」(日記、一九四一年一月九日)のであって三月までは前記の教育所に勤務し、一九四一年四月、諏訪中学校および諏訪商業学校に単身赴任することになったのであった。両校には一九四三年三月まで二ヵ年勤務したのち、辞して同年三月二八日に再び上京した。

上京後の生活設計に関して、森下は一九四三年二月二一日の日曜日に東京に帰っている。このとき「西尾君を訪問して四月上京後の仕事の相談をしたところ、西尾君が今度担当せられる文部省の『中学校国語読本』編纂の仕事を手伝う様にすすめてくれたので、喜んでお請けして来た」(日記、二月二四日)のであった。一九四〇年校長退職の時点では、西尾が世話をした教科書会社のことがなかったことを示している。また、矢口誠よりの東京日本橋高等女学校夜間部の教務主任(日記、三月五日)、加藤因よりの日本体育会荏原中学校の国語漢文主任の就職斡旋(日記、三月一九日)があったが、何れも専任教員では「文部省の仕事」と自らの勉強計画との両立が困難であり、それを辞退し、後者には「週三日、一五時間以内位ならば」採用してほしいと依頼している(日記、三月六日、五月一日)。

かくて、西尾の斡旋した岩本町の教科書会社で仕事をはじめたのは一九四三年四月初旬であろう。森下は「この頃来、西尾君の新制『中学校国語読本』編纂の手伝をなし始めたるがためなり。文部省嘱託として、仕事はこの中等教

科書株式会社の編纂室にてなすわけなり」（日記、四月一四日）と書いている。そして、これを「有意義な仕事だから出来る限り力を尽そうと思」っている（日記、三月一九日）。こうした教科書会社への出勤の記事は一九四三年四月以降しばしば見られる。

森下の退職上京就職についての西尾の前記の二文は、一九四〇年の第一回の上京と一九四三年の第二回目のそれとを混同したもので明らかに記憶ちがいであり、それを受けて述べたと思われる平沢武男氏の「西尾を頼って行っちゃって」というような軽薄な理解は事実とかけはなれた誤りであることも判明する。

第二の点は、「卒業式の一〇日前」に退職という上条耿之介氏のきわめて確定的な叙述である。前記の西尾の文には、「卒業式直前に退職」の叙述はない。ただ、かれは森下辞任のことがらをたいそう感動的に述べている。西尾の不確かな記憶（「森下二郎君とその生涯」）では、森下のやめる前年の一九三九年によしゑ夫人からの、森下がひどい神経衰弱症と手術を要する背中の癰のために回復の見込みがないという知らせで、かれを見舞う。ここで夫妻と語ったことを西尾は、後に当時の森下日記と対照して、時局下の「内と外とのこうしたギャップ」[5]が、「彼の病気になった悩みであったことは疑う余地がない。しかし、その当時は、それをそれと考えることはできないような時勢であった。わたしとの話し合いでも、それはそれとして話し合いながら、それが彼の病気の原因だと判断することができなかったことが残念でたまらない」。「気楽に休むさ、といった程度で帰ってしまったことを深く恥じる」。「彼の深い悩みとはげしい怒りとは、かくして、ひそかに日記としてのみ書きつけられたのである」と述べている。

上条氏は、「直前」ないし「一〇日前」とする場合の傍証も、まして直接の証拠も明らかにしていない。そうだとすれば、森下辞職の一種劇的なことがらが、西尾のたいそう感動的な文をベースにして、上条氏において、「三月三

一日を待たないで」辞職したことが、「卒業式を待たないで」に飛躍したのだろうかと推測する。そして、次には西尾自身が、森下は「自分の内心で信ずることもできないという苦しみを経て神経衰弱に陥り、卒業式を近くにひかえた三月十五日に辞表を提出した」と語るのである（西尾実「森下二郎を語る」『伊那』一九七三年二月号、伊那史学会）。

かくて、西尾実、清水義穂編『神と愛と戦争・あるキリスト者の戦中日記』（一九七四年刊）の「解題」においても、「ふかい精神的苦悩におちい」り、「一九四〇年には卒業式をまたずして校長職を退いてしまっている」（同書、二五七ページ）とされているのである。

劇的な退職が、関係者の間をキャッチボールのように往復しながら叙述されているあいだに、「卒業式前」に定着し、正史の中で「史実」となったのであった。

長野県の教育界における西尾実の存在は大きい。いま、雑誌『信濃教育』（信濃教育会）一〇〇〇号（一八八六年～一九七〇年）の「執筆者別総索引」[6]によって執筆回数を数えると、金原省吾、一四六回（期間三五五～八五八号）、渡辺敏、一二六回（同三～四九六号）、西尾実、一二五回（同三三六～九八四号）、土屋弼太郎、一一三回（同三三二～九九六号）の四名が抜群であり、淀川茂重（七四回）、上条憲太郎（六四回）、久保田俊彦（島木赤彦、五四回）、唐木順三（五三回）らが続く。西尾が長野県での教職を捨てて上京するのは一九二五年二月末であるが、[7]前記一二五回中の五三回は上京後の執筆回数である。これはひとつの指標であるにすぎないが、第二次世界大戦後にも、国立国語研究所長、法政大学名誉教授西尾実は、郷里の、また教育者の、先達として長野県教育世界において一種権威であり続けたことはうかがいうる。

西尾の若い日、長野師範学校卒業後、最初の赴任校において、そこに前年より勤めていた森下との邂逅は、かれが

森下について書くごとに記しているように、深い意味をもつものであった。西尾は、「人間としての目を開かせられ、わたしの生涯の門出になったのは、兄のような、また師のような親友の影響であった」[8]と回想している。森下は「切実に百年の知己を求めて書いた人」であり、西尾は「ある時期までは、そういう知己のひとりとして許されていた」（傍点は宮沢）。そしてかれは、「森下君はわたしよりも四年の年長だから、もしわたしがあとになったら、森下君のこういう著作を出版する責任があると考えたことが一再ではなかった」[8]。こうした西尾の「森下君の日記と書簡を公にしたい」[8]思いが、雑誌『展望』への「戦時下日誌――一教育者の遺した魂の記録――」（一九六六年八月号）および「逆流に抗して――一教育者の遺した戦後日誌――」（同年一一月号）の紹介として実現し、またそれらを支えたのが森下を敬愛する、たとえば「森下日誌を読む会」（一九六七年三月発足、一九八二年一〇月現在第一八四回）の人びとであった。西尾によって森下は世に知られるにいたったことは間違いない。

しかし、同時に西尾の大きさが、ここに挙げた二点の誤れる「史実」をも生ずる一因になったのではなかろうかということを示唆すれば、この章の趣意はほとんど足りる。

なお、森下日記原本には、公刊の『神と愛と戦争』の二月一九日と四月九日の間の三月八日に、田中準「Walter de la Mare『童話名作集』百屋鴻三訳註」という約七四〇字ほどの切り抜きの貼付があるのみである。同年一月以来の日記のほとんどを同書は掲載しているが、欠落しているうち、当時の森下をうかがいうるものは二月一一日の記述のみと言っていい。当日の紀元節拝賀式には一言も触れず、「不思議がるエスキモー★グリーンランド」という小さなコラムの切り抜きを貼付して、それをコメントしている。その両者を紹介しておく。

イースターングリーンランドの検閲官のミッケルセン大佐はグリーンランドのエスキモーたちがヨーロッパ人の行つてることを不

思議がつてゐる様子であるのに気づきました、エスキモーたちはラヂオを持つてるので大佐に戦争とはどんなものかと熱心にききました彼らが戦争は人間同志で殺し合ひをすることだと聞かされて白人は気違ひになつたのだらうといひました

△エスキモーたちは白人は気違ひになつたのだらうと言つたといふ。白人ばかりではない。東洋の黄色人種も、今や全世界を挙げて、気が狂つてゐる。戦争の洪水に翻弄されてゐる。豫言者の声などは耳を蔽うて聴かうともしないのである。トルストイの声も忘れられた。内村鑑三先生の声も忘れられた。ガンヂーの声も顧みられない。げに全世界は今や戦争の熱に浮かされてゐる。

三　『校友会報』における森下校長

松本高等女学校『校友会報』は、一九三三年四月森下二郎が校長に就任した年の七月二〇日に創刊され、かれの退職する年度までに一三号が刊行されている。

この間、会長森下二郎が寄稿したのは一〇回、いずれも巻頭の短文である。表題は一〇篇中「所感」が五、「思ふこと」が四（正確には「思ふ事三つ」、「読書に就て思ふこと」、「思ふこと二つ」、「思ふところ」）および、「寸言」であり、広い意味で一〇篇すべてが「所感」であるといっていい。そこには十代の生徒に与える人生訓が一貫して述べられている。が同時に自分に言いきかせている。たとえば、創刊号では中江藤樹の言葉を引用して、「学問といふのも要するに心をみがくことである。心を修めることである。心が光を持つやうになること、それが学問の理想である」と述べ、校友会報発刊も「これが吾等の心をみがくこと、即ち吾等の真の学問の助けとなることを希望する」と結んでいる。

各文においてかれが繰りかえし訴えたのは学問の目的であり、良き精神であり、励んで働くことであった。それらはいずれもストイックな格言に似た寸言であるが、ときにはたいへんわかりやすく、少女たちに諭すように陶淵明を

引用して次のようにも述べている。

学問をするのには時がある。もとより学問は常にしつづけて行かなければならないものであるけれども、然し最も学問に勉励するのに適当な時期がある。丁度野菜をつくるのに、種を下す時期があり、盛に生長する時期があるやうなものである。適当な時に種を下し、適当な時に生長する様であつてはじめてよき実を結ぶのである。如何なる時期に種を下してもよく、如何なる時にも生長し得るといふものではない。

「その学ぶ時は今である」ことを諭し、「歳月は人を待たない。努めて真実に学問をして行き度い」と結んでいる。(9)

この『校友会報』は元来、「お互の意見や心持を発表」することによって、「お互に向上の一路に精進したいため」であり、「校風発揮に貢献する所あらんことを切望して」(「発刊の辞」)刊行されたのであった。

校風のなかに「時局」が色濃く反映するにいたるのはこの学校に限らない。松本の歩兵第五〇聯隊見学の行事はかなり早い時期からおこなわれていたようであり、すでに創刊号の「学校日記」にも「六月二十八日(水)四年兵営見学」と記録されている。五〇聯隊という郷土部隊の膝元ゆえに、あるいは自発的あるいは強制的なそれとかかわる行事が学校暦のなかに入り込むのは当然かも知れない。たとえば、一九三三年第二学期の「学校日記」のそれを拾うと次のようなものがある。

九月十八日(月)聯隊ノ慰霊祭ニ参列
十月　九日(日)星野少佐以下十七勇士遺骨出迎
十一月十四日(火)満洲ヨリノ帰還兵出迎ヘ
十一月二十日(月)渡満兵見送リ
十二月　八日(金)渡満初年兵見送リ
　　九日(土)戦死者十四勇士ノ遺骨出迎ヘ

十二月十一日（月）凱旋部隊出迎へ[10]

生徒の「聯隊見学」記は第六号（一九三五年七月二五日発行）に一篇が初出、第八号（一九三六年七月二五日発行）に三篇、第一〇号（一九三七年七月二五日発行）に二篇が掲載されている。また、一九三七年七月の日中戦争勃発後の第一一号（一九三八年三月一五日発行）では、「出征将兵へ慰問文」一〇篇（一、二年生）、「時局所感集」一三篇（三、四年生および専攻科各学年）が特集されており、純真な女学生の筆になる「目覚めよ、支那」の一文などは、いま読んでむしろいたましい。

それらを書かせた「時局」をうかがわせる編集「後記」は、「我等が先づ贈る心の花束である。この純情無礙なる心の花束こそは一に凝つて皇国の運命をさへ支へ得る礎石ともなり得る。〔中略〕銃を持たざる者も亦この強さあることを示したいのである」（秋山善次）と賞揚している。しかるに、同号巻頭の森下は「所感」と題して、一言も「時局」に触れず、文頭に「静かに働かう。働き続けよう」と書き、それを説明して「勤労は実に天与の至福である」と結んでいる。ここでも、創刊号以来のストイックな寸言を短く述べているのみである。それが上条氏のいう生徒を「放ってある」ことで、森下が「一人悶々」ということなのだろうか。

森下のこうした一貫性のなかで唯一の例外が第一二号（一九三九年三月二〇日発行）の聖戦を説いた「所感」であった。本誌前号の拙文中に引用したこの「所感」の文頭の三行を除いて、それに続く全文を資料としてここに掲げておく。

挙国一致して、尽忠報告（ママ）の精神を発揚し、堅忍持久、あらゆる困難を排して、生活を刷新し、勤倹力行質実剛健の風を振作し、如何なる艱苦欠乏にも堪へ得る心身を鍛錬し、又資源を愛護して経済上の難局に対処しなければならないのであります。即ち我が皇

軍の将兵諸士が日夜戦線に奮闘せられつゝあるその忠誠の精神と実践とを吾等の日常生活に具現して、吾等各自の務に精励しなければならないのであります。

此の、各自の務めに精励すること、これが此非常時に対する覚悟と実践との根本であります。これなくしては決して所期の目的は達せられない。各自其職に精励せよ。これ尽忠報国の真髄であります。各自の職に於て、各自の日常生活に於て、皇道を発揮せよ、日本精神を発現せよ。これ真の報国であります。

されば学生である吾等は学生としての本分を守り、熱心誠実に勉学すること、これが吾等の務めであり、これが国家に尽くす所以であります。非常時局に処して特に此事を忘れてはなりません。

この一文は、森下の巻頭言中もっとも長文であり、かつまったく異質の突出した内容の文である。文末の「されば学生である吾等は云々」に森下の突出しない部分があるとはいえ、当時公認のレディーメードの思想と言葉の羅列であり、森下の思想と言葉ではなかったことは明らかである。この型の言葉は巷に充ち溢れていたのである。戦時下では、この号だけが巻頭言と本文中の教師や生徒たちの「お互の意見や心持を発表」した各文章と内容的に一致していたのである。

結び

森下二郎が内と外との相剋に破られていく、きまじめな教育者の悲摧な情況について、前号拙文につづけて小さな窓口から垣間見てきた。あるいはその悲摧の森下の強い印象が正史中の「史実」措定に影響を与えたのかも知れない。私は歴史研究にかかわる一人の自戒として、前号で留保した事項をここにノートしておきたい。

なお、「松本高等女学校の教員室の中に、ひょっとして彼と同じ思想をもった若い先生がいたかもしれず」[11]という可能性の検討、また「先生の内に持たれた思想、信仰等を烈しく勇敢に外に出されたら生徒にきっともっと異った人

物が沢山出たと思」[12]われる蓋然判断は、ともに興味ある課題であるがいま再び留保しておく。

(1) 『長野県松本蟻ケ崎高等学校七十年史』中の「校長森下二郎と生徒との対話——女学生の手記より『愛と死』——」(二四七—六ページ)は、森下を訪ねた一生徒が愛について訊き、死について語ったことを記録したものである。同書中では、生徒は匿名であるが、それが小岩井徳子氏の日記であることは同氏から直接うかがったし(一九八二年二月一六日)、またその後、書いていることも知った(小岩井徳子「四十年かかって——森下先生の日記——」『こすもすだより』第二八三号、一九八一年二月)。教師が生徒の質問に単純に応答したものではなく、森下の直面している苦脳そのものが表出しており、若い生徒は森下の人間の姿に深い感銘を覚えているのがよくわかる。当時の回想とその私淑は、小岩井徳子「播かれたもの」(『回想の森下先生』所収、一九六五年、信濃教育会出版部発売)に詳しい。

なお、森下の飯田高等女学校時代(一九一九年一〇月二五日〜一九二一年三月五日)の生徒(一九二四年三月卒業生・匿名)は、二年生の国語担任の森下との出会いが「その後の生き方の指針となった」として次のように記している。「先生から文学を通じて、人間と言う複雑なるものの姿、自分一人の原体験としての人生でなく、古今東西の人々の真実な生き方を己のこととして識ることの喜びを与えられました」。「特に森下先生の人間への愛の深さ、正義への追求は、子供心にも抜群に見えました」(『わが半身像』森下二郎先生」『風越山を仰いで・創立八十周年記念誌・長野県飯田風越高等学校』長野県飯田風越高等学校内八十周年記念誌編集委員会、一九七一年二月一四日発行、一七〇—一ページ)。

(2) 小岩井徳子、前掲「四十年かかって」。

(3) 和田洋一「孤高の教育者の反戦日記」『朝日ジャーナル』一九七四年六月二八日号。

(4) 一九八一年一一月六日、森下よしゑ氏談。

(5) 宮沢、前掲論文参照。

(6) 信濃教育会編『雑誌「信濃教育」総目次——付執筆者別総索引——』(一九七一年、信濃教育会刊)。

(7) 西尾実『教室の人となって』(一九七一年、国土社刊、一一一ページ)。

(8) 西尾、前掲「森下二郎君とその生涯」。

(9) 森下二郎「所感」『校友会報』第四号、(一九三四年七月二五日発行)。

(10) 『校友会報』第二号、一九三三年一二月二五日発行。なお、こうした「時局」が学校のなかに深く入り込むさまについては、私はかつて「一九三〇年代の一キリスト教主義女学

校――同志社高等女学部の状況――」（『キリスト教社会問題研究』第二五号、一九七六年）、「同志社高等女学部の始終――一九三〇年代の状況――」（『同志社時報』第六〇号、一九七七年）などで扱った。

(11) 和田、前掲文。

(12) 西田千恵子氏、一九八二年七月一三日の書簡。

付記　本稿作成にあたって資料・文献の借覧やさまざまの便宜をはかっていただいた小岩井徳子氏、宮沢潔子氏、森下延子氏、森下よしゑ氏、中村忠雄氏、西田千恵子氏、登内順三氏に感謝する。